

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	秦 明子
論文題目	ロレンツォ・デ・メディチの時代における詩と絵画		
(論文内容の要旨)			
本論文は、ルネサンス期のフィレンツェの文化・芸術・社会を象徴する人物ロレンツォ・デ・メディチ（イル・マニーフィコ）のパトロネージに焦点を当てることで、当時における文学（詩）と美術（絵画）、さらに広く芸術と政治とのあいだの密接な関係を、実証的かつ歴史的に再構築するとともに、その美学的な意義を問うものである。ロレンツォは政治家であるとともに、芸術家の擁護者にして、みずから詩人でもあり、さらに新プラトン主義の哲学者たちともつながりをもつという、多彩な顔をもち、まさしくフィレンツェ・ルネサンス文化の最盛期を築いたといっても過言ではない人物である。 この偉大な文化・芸術の立役者の時代にあって、とりわけ詩と絵画との密接な関係から切り込もうとする本論文は、以下の三部構成からなる。すなわち、第一部「都市と職人たちの歌——パラッツォの内と外」、第二部「田園と神々の世界」、第三部「神話と歴史のあいだ」であり、さらに各部はそれぞれ二つずつの章からなっている。全六つの章のタイトルは、順に、「SEの画家による一枚の銅版画をめぐる」、「詩画論再考——神話画をめぐる15世紀後半のフィレンツェの先駆性」、「アポロンとパン」、「『最高善について』——『カマルドリ論議』との比較から」、「ロレンツォ・デ・メディチの世界観についての一考察」、である。これら本文を挟んで、最初に「序論——研究の目的、問題提起と本論の構成について」が、最後に「結論——ロレンツォのパトロネージの特殊性」が置かれる。 第一部では、都市部におけるメディチ家のパラッツォの内と外を舞台に、職人たちを題材としてロレンツォが創作した一連の「謝肉祭歌」と、その世界観を映し出す作品と評される銅版画に注目し、ロレンツォが政治的かつ文化的な理由から民衆的祝祭、カーニバル的世界を重視していたことを指摘する。さらに、「詩は絵画のように（ウト・ピクトゥーラ・ポエシス）」という古代の美学的理念が、ロレンツォ治下のフィレンツェにおいて新たに再浮上し、文学と美術との交流を活気づけていく経緯が辿られる。 第二部では、以上の前提を踏まえて具体的に、ロレンツォがフィレンツェ郊外に建設させた二つのヴィッラ（別荘）——ポッジョ・ア・カイアーノとスペダレット——に焦点を当て、それらのヴィッラを飾るタブロー画やフレスコ画、さらに浮彫りなどの装飾プログラムと、ロレンツォの詩「牧歌」との関連を詳細に分析する。まず、スペダレットのヴィッラのためにロレンツォが画家シニョレッリに注文した神話の牧神《パンの王国》（第二次世界大戦の犠牲となり現存せず）と、ロレンツォの牧歌「アポロンとパン」および「アンブラ」が比較検討されるとともに、人文主義者マルシリオ・フィチーノがロレンツォに宛てた書簡を補助線とすることで、この絵が、ロレンツォの敬愛する祖父コジモ・デ・メディチの掲げた統治の望むべき「理想の王国」を投影したものであることが明らかにされる。さらに、もうひとつのヴィッラであるポッジョ・ア・カイアーノの正面のフリーズ浮彫り装飾の神話主題についても、ウェルギリウスの『農耕詩』を典拠としてユピテルに捧げられたものであることを論証し、その構想に、ロレンツォ自身の思想に立脚した宇宙論的な自然観が反映されていることを明らかにした。			

最後に第三部では、本論文の総括として、以上の具体的な考察を踏まえて、ロレンツォの芸術観とパトロネージの意義、独自性について検討する。まず、ロレンツォがフィレンツェの統治者となって三年後に執筆した『最高善について』を、彼とつながりのあった人文主義者ランディーノの著書『カマルドリ論議』やフィチーノの書簡詩『幸福について』と比較することで、ロレンツォが「活動的生」と「瞑想的生」について独自の思想を練り上げていった点が明らかにされる。「活動的生」と「瞑想的生」は、中世以来キリスト教において後者に優位が与えられてきたが、ロレンツォは両者の結合、あるいは均衡という独自の理想を、ヴィッラの装飾プログラムに助言を与えることで表明していた。これはまた、フィレンツェの都市部と田園部との矛盾の解消という統治の理想とも合致するものである。

以上の考察から明らかとなるのは、ロレンツォにとって、詩作と統治、詩人であることと統治者であることが、矛盾することなくいかに調停され、いかに統合されていたかという点であり、このことが彼の時代のフィレンツェの芸術文化の繁栄と独自性をもたらしているという点である。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ルネサンス期のフィレンツェを代表する為政者にして詩人、哲学者にして芸術のパトロネージでもあるという多彩な顔をもつ異才、ロレンツォ・デ・メディチという人物像の核心に迫ろうとするものである。本論文の評価すべき点は、次の三点に要約される。

すなわち、(1) ルネサンス・フィレンツェの芸術と文化の特異性を、ロレンツォ・デ・メディチ(イル・マニーフィコ)という、統治者(政治家)にして文学者(詩人)にして人文主義者(新プラトン主義者)でもある主要人物の役割を通して新たに読み解こうと試みている点。(2) その目的のために、ロレンツォの詩作に焦点を当てている点。(3) これまで解釈において揺れていたシニョレッリの絵画作品《パンの王国》や、ロレンツォのヴィッラ(別荘)であるポッジョ・ア・カイアーノの正面フリーズのテラコッタによる浮彫り装飾(ベルトルド・ディ・ジョヴァンニその他による作)のプログラムに、新しい解釈の可能性を提示した点、である。

ロレンツォ統治下のフィレンツェの芸術文化の特異性については、これまでフランスのアンドレ・シャステル等の研究はあったものの、また、イコノロジー(図像解釈学)の方法に基づく絵画作品の解読のために当時の文学や新プラトン主義の思想が参照されることはあったものの、政治(統治)と文学と芸術とを総合的に論じるという試みは、少なくともわが国においてはこれまで本格的になされてきたとはいえない。その意味で本論文は、領域横断的なアプローチによって、ロレンツォその人のみならず、その時代の本質に迫ろうとするものでもある。

順番は逆になるが、具体的に(3)から述べるなら、シニョレッリの《パンの王国》に関して、本論文では、それがロレンツォ自身によって画家に注文され、スペダレットのヴィッラに飾られていた可能性がきわめて高いことが、メディチ家の財産目録等の読み取りを通じて明らかにされる。さらに、ロレンツォの牧歌詩「アポロンとパン」や「アンブラ」と、この絵画との関連が具体的に検討され、絵のなかの牧神パンを祖父コジモに、光によって象徴されるアポロンを絵の観者たる自分自身に見立てることで、田園と都市との融合という統治の望むべき姿(理想の王国)が投影されていることが明らかにされる。

一方、ポッジョ・ア・カイアーノのフリーズ装飾についても、ウェルギリウスの『農耕詩』を補助線に引くことで、ロレンツォ自身の思想に立脚した宇宙論的な自然観をもとに構想された可能性が指摘される。すなわち、広大な農地を背景に建設されたこのヴィッラは、天上界を支配するユピテルに捧げられ、「農耕」を象徴する神々と人間との理想の関係を表わしたものと解釈されるのである。さらに「ローマ建国」のテーマとも重ねられ、フィレンツェにおける「オクタウィアヌス」あるいは「アウグストゥス」の役割をロレンツォに担わせることで、フィレンツェとその周辺支配領地における農耕の繁栄と平和の願いが、フリーズ装飾に込められていることが指摘される。

これらの解釈は、さまざまな先行研究を踏まえたうえで、それらとはまた別様に提示された新しいもので、本論文に独自のもとして評価できる。それが可能になったのは、上記の（２）で述べたように、ロレンツォの詩を丹念に解読したことによる。ロレンツォの詩作品と、彼のパトロネージによる美術作品との関係は、これまで先行研究でも簡単に触れられてはきたものの、具体的な内容や思想にまで踏み込んだ形で論じられることは少なかった。その意味でも本論文の意義は大きい。

さらに、こうした議論を踏まえたうえで本論文が明快に打ち出そうとするのは、ロレンツォのパトロネージの独自性である。そこには、統治者にして商人、詩人にして哲学者でもあるこの典型的なルネサンス人の精神がはっきりと反映されている。ロレンツォにあって、詩作と統治、「活動的生」と「瞑想的生」の調停こそが理想の生のあり方なのであり、その理想が、彼みずから画家や彫刻家や建築家たちに注文し、そのプログラムにおいて助言を与えたと考えられる芸術作品のうちに結実しているのである。キリスト教においては「瞑想的生」がもっぱら優位に置かれてきたが、ギリシア＝ローマの神々たちの復興の中で「活動的生」が新たに読み替えられ、両者の「中庸」が理想として掲げられる。短い時期であったとはいえ、ロレンツォの統治下、15世紀の末にフィレンツェ共和国の芸術文化が独自の展開を遂げたとするなら、その要因に、こうしたロレンツォの理想があったことを、本論文は、当時の美術作品と文学作品と哲学の著作を縦横に駆使しながら、積極的に論じている。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年9月7日、論文内容とそれに関連する事項について試問をおこなった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。